校内別室指導について

不登校児童の状況

対象児童は、「学校の流れに合わせるのが大変」という理由で不登校となった。また、苦手な活動に参加できないことが多かった。校内別室を開室してからは、校内別室に通うことで登校日数が大幅に増加している。医師とも連携して今後の支援の在り方を検討している。

具体的な取組

○担任との関わり

担任と毎朝顔を合わせ、その日に行う学習内容の確認や下校前の振り返りを一緒に行っている。

担任が毎日関わり、学級の予定等も話すことで行事に参加する意欲も高まっている。

○家庭科実習

これまで、１階にある校内別室にしか行けなかった。別室登校している同学年の児童と一緒に家庭科の調理実習をすることを提案すると、２階まで上がることができた。

授業がない教員が、個別に実習を行った。

○自然教室への参加

宿泊学習への参加を目指して、担任、保護者、支援員の三者が連携して支援した。支援員は、当該児童の気持ちに寄り添い児童の本音を聞き出すよう努めた。

その結果、宿泊行事に楽しく参加することができた。

○他の児童との関わり

校内別室を利用する児童との出会いや関わりが良い影響を与えている。

一緒に勉強をしたり、給食を食べたり、トランプ等のカードゲームで交流したりすることで、人間関係を築くことができ、友達とより良く関わることへの学びにつながっている。

成果

個別対応により、一人一人の良さに着目できたり、できることを増やしたりすることができている。別室を利用する児童同士の関わりが生まれ、お互いの成長にもつながっている。

課題

支援員がいないと個別に課題に取り組むこと、児童の不安を解消するため、支援員との関係性を構築するのに時間がかかること、人材を確保し、支援員の配当時間を増やすことが必要である。

特別な部屋ではなく、誰もが心休まる居場所に

不登校児童の状況

対象児童は、不登校の状態が長期化していた。保護者と連携し、昨年度は担任が週１回程度の家庭訪問を実施し、関係を築いていた。ＳＳＷとの連携、他の児童の保護者の協力も加わり、友達の訪問や交流が進む中、教室に向かう前の心と体を整える場所として校内別室を利用した。現在では学級に戻り仲間と楽しく生活している。

具体的な取組

○校内別室の活用

教室一つ分をパーティション等で分割し、グループでも個別でも使用できるようにしている。休み時間に、支援員とおしゃべりに来るなど、全ての児童を受け入れている。教室内の掲示等は利用する児童も手伝い、温かい環境を作っている。

○校内別室指導支援員による教室巡回

支援員が各教室の様子を巡回する。別室での様子からより深い児童理解を図っている。また、気になる点があれば担任や養護教諭、ＳＣ、ＳＳＷ、管理職らと情報を共有し、不登校等の未然防止に努めている。個別の声かけで学習支援をすることもあり、全校児童との関係づくりに生かしている。

○保健室との連携

校内別室を保健室の隣に設置し、教室以外の居場所を必要とする児童の様々な状況を養護教諭と支援員が情報共有して対応している。養護教諭と校内別室指導支援員が行き来しながら見守り、休息、相談、必要な学習指導を取り入れ、連携して支援をしている。

○校内支援委員会への支援員の参加

全校児童の状況を具体的に把握し、不登校の未然防止並びに児童のケアに生かしている。学級での児童と担任、保護者と担任、関係機関や特別支援教室との関わりも知ることで、一人一人の児童への理解を深めて日々の支援や保護者対応に生かしている。

成果

児童の学びの機会と場所を増やすことができた。また、誰もが心休まる居場所としたことで、休み時間に来て過ごし、授業等で教室に戻る児童がいる。支援員の支援は、児童理解の視点が増え、教職員の気付きにつながり、不登校の未然防止につながっている。

課題

教室に抵抗のある児童が初めの一歩を踏み出せるためのアプローチの仕方を検討すること、別室環境と人材を継続的に確保すること。

校内別室・教育支援センターを利用する不登校生徒への支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は中学校１年生の頃から教室環境に適応できず、１学期から休みがちになり、２学期からは不登校になって、校内別室に登校をするようになった。２年生になり、教育支援センターに入所し、校内別室と教育支援センターを隔日で利用している。

具体的な取組

○校内別室の活用

教室に入れない、気持ちを落ち着かせることが必要な生徒に対して校内別室を設置している。校内別室にはスクールサポーターが常駐しており、登校した生徒の対応を行っている。

○外部機関・教育支援センターの活用

教育支援センターへ生徒をつなぐに当たり、市の相談室とも連携して支援を進めた。当該生徒や保護者との面談を通じて、教育支援センターへの理解を得られるよう、相談員と協力して対応した。

○個別支援委員会の設置

当該生徒の校内別室利用、教育支援センターの入所に当たり、校内の個別支援委員会で検討を行った。個々の生徒に合わせた支援の方針について協議、検討を行うことで、学校として組織的な支援を行える体制づくりを進めている。

○ＩＣＴ機器の活用

生徒との連絡手段としてＩＣＴ機器の活用を進めている。一人１台端末を用いた直接の連絡のほか、アプリで保護者とも連絡等を行っている。

成果

教育支援センターへの入所以降、学校への登校の頻度が増えた。また、教育支援センターでも学習する環境ができたことで、生徒の学習に対するモチベーションの向上が見られるなど、当該生徒に合った学習の場を提供できた。

課題

支援につなげるまでには保護者、生徒の理解を得る必要があり、一度のアプローチで学部機関につなぐことは困難で、粘り強く取り組む必要があること。

校内別室での不登校の対応について

不登校児童の状況

　対象児童は、小学校に入学した当初は登校できていたが、徐々に欠席が続くようになった。教室に入ることを拒絶することもあり、週１日、遅刻や早退であっても登校できればよい状況となった。

具体的な取組

○校内別室の活用

　当該児童は、教室に入ることを拒み、教室に入ろうとすると気持ちが落ち着かないことがあったため、校内別室の利用を始めた。指導支援員と共に過ごすことで、気持ちを安定させて生活できるようになった。

○校内別室指導支援員による学習補助

　担任から学習プリント等をもらい、校内別室指導支援員と一緒に、校内別室で学習に取り組むことができた。当該児童が学習に遅れることがないよう配慮した。

○外部機関との連携

　保護者に教育相談室を紹介し、学校外の機関で当該児童と保護者の相談を行うことができた。また、保護者にＳＣやＳＳＷを紹介し、保護者の悩みや当該児童の対応について、定期的に相談できるようにした。

○担任と当該児童との関わりの充実

　担任は当該児童と登校の時間帯を相談し、できる限り関わる時間を確保することで信頼関係を築いていった。

　また、当該児童の学校や家庭での様子を、保護者と電話や面談で情報交換し、共通理解を図ることで、当該児童の支援の方向性を確認することができた。

成果

　当該児童は、１学期は週１、２日程度の登校日数から、２学期は週４、５日程度の登校日数に増えた。また、指導支援員との別室指導から、教室内で学習に取り組む時間が増えた。

課題

　当該児童は、気持ちに波があり、落ち着かないときがある。児童が気持ちを落ち着かせる方法を身に付けるなど、当該児童が多くの時間を学校で過ごせるよう支援していく必要がある。

校内別室での対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時は、通常通り登校していたが、部活動内での人間関係のトラブルから１年生の 11 月から欠席が増え、1 月から欠席が続くようになった。保護者は当該生徒の意思を尊重している。２年生の１学期の中間考査以降から、校内別室に登校するようになり、2 学期からは遅刻もせずに別室登校ができるようになった。

具体的な取組

○校内別室での学習支援

教室の授業と連携し、英語や数学の分からない部分を支援員のサポートを受けながら学習している。

自ら学習内容を選択し、漢字などの自習の場として活用している。

○ＳＣによるカウンセリングの実施

自分の気持ちをアウトプットすることで、気持ちを整理させている。

当該生徒の不安や現状の気持ちを確認し、支援の方向性を決める。

校内支援委員会で情報を共有する。

○学校とのつながりを維持

校内別室利用時の記録用紙を通して、担任等が登校時の様子を把握する。

別室登校時に担任や学年教員と別室でコミュニケーションを取ることで関係づくりを維持している。

学校と保護者と支援員で連絡を密に連携をしている。

○小集団の活動時間の設定

ゲーム（カードゲームやボードゲームなど）を通して校内別室を利用する複数の生徒とコミュニケーションを取る活動を実施し、教職員以外にも生徒同士でコミュニケーションを図る環境づくりを大切にしている。

成果

校内別室を活用することで、本人の登校への抵抗感がなくなり、安心して登校することにつながっていて、出席率が 74 ポイント向上している。

２年生 1 学期 23.6%➡2 学期 97.6%

課題

校内別室を活用する生徒が同時に複数人いるとき、支援員の人数や活動する場所が不足していることが課題である。

校内別室について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校３年生であり、対人恐怖症のため、学級に入ることができない。学校には登校したいと思っており、毎日個別学習室を利用し学習している。担任と話をしたり給食時は仲の良い友達と一緒に食べたりするなど、学級とのつながりはもっている。教育支援センターで体育の授業を受けたり、フリースクールで体験活動を行ったりするなど、外部機関とも連携している。

具体的な取組

○校内別室の環境

学習環境を整備し、以下の様々な場所や学習活動の中から選択して当日の内容を決める。

・個別ブース…５席（左側奥）
・フリーブース…４席（写真中央）
・作品展示マイギャラリー（写真左奥）
・ＳＳＴ系のプリント、工作ができる道具類等の設置

オンライン学習環境の整備

別室利用前にオンライン授業を進めることができるように環境を整えている。当該児童の利用はまだないが、学年が上がった時に利用を想定している。他の別室利用の児童ではあるが実施して教室に戻れた事例もある。

オンライン希望者には、イヤフォンを個別で貸出している。

○個別学習室での時間割

継続的に学習できるように個に応じた時間割を決め、見通しをもって学習に取り組めるようにしている。

校時	個別学習室の時間割
1	ウォーミングアップ
2	算数
3	国語
4	やりたい教科（もしくは算数）
	給食 ※昼休みは教室・校庭・相談室
5	やりたい教科（もしくは国語）
6	やりたい教科

○生活の記録の作成

登校したら、支援員が当該児童から一日の予定を聞く。

当該児童の自己決定を第一に予定を立てる。

プリント等の成果物は個別のファイルに入れ、たまったら持ち帰るようにする。

成果

・校内で連携チームを作ることができ、改善案や提案が出しやすくなるなど、校内体制が整ったこと
・運用版と直接支援版の２種類のマニュアルを作成したこと
・個別学習に使用する教材が充実したこと
・利用児童とＳＣ面談の調整を行ったこと

課題

・支援員、教員間の引き継ぎ
・トラブルへの児童同士の対応と指導等
・システムの定着に向けて体制を整備すること

校内別室指導における支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校３年生であり、他の生徒に見られたくないため、学校裏口から別室登校している。好きな数学を中心に学習している。時々支援員と、家族のことや家での過ごし方などを率直に話すことができている。担任とは話ができるが他の教員とは関わることができない。

具体的な取組

○配置図(レイアウト)

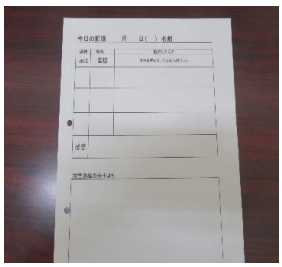
会議室の一室をパーティションで区切り、複数の生徒が同時に学習することができる。支援員は１、２人配置している。

○学習内容

当該生徒の教科担当が作成した課題を使用している。小学校時代から不登校であったため、小学校時代の学力が十分でない教科が多く、学び直せる課題を作成することで、当該生徒に合った支援の実現を目指している。

○学級担任との連絡方法

別室登校した場合に、必ずしも学級担任と顔を合わせて話ができるわけではない。そこで、その日の学習内容、活動の様子等を書き記すノートを活用して関われるようにしている。



○支援員同士のつながり

毎日同じ支援員が指導しているわけではなく、日替わりである。生徒情報を密に連絡るために、指導の様子や生徒情報をノートに書き、情報共有して別室指導を行っている。

成果

個別対応で、当該生徒の状況に合わせた学習をしていることが、生徒の大きな成長につながっている。教室に戻り、一斉授業で学習するようになっても、大きな戸惑いがなく進められるきっかけになっている。

課題

校内別室は、現在４人の生徒が利用しているが、人数が増えた場合、教室と支援員の数が不足してしまう。